

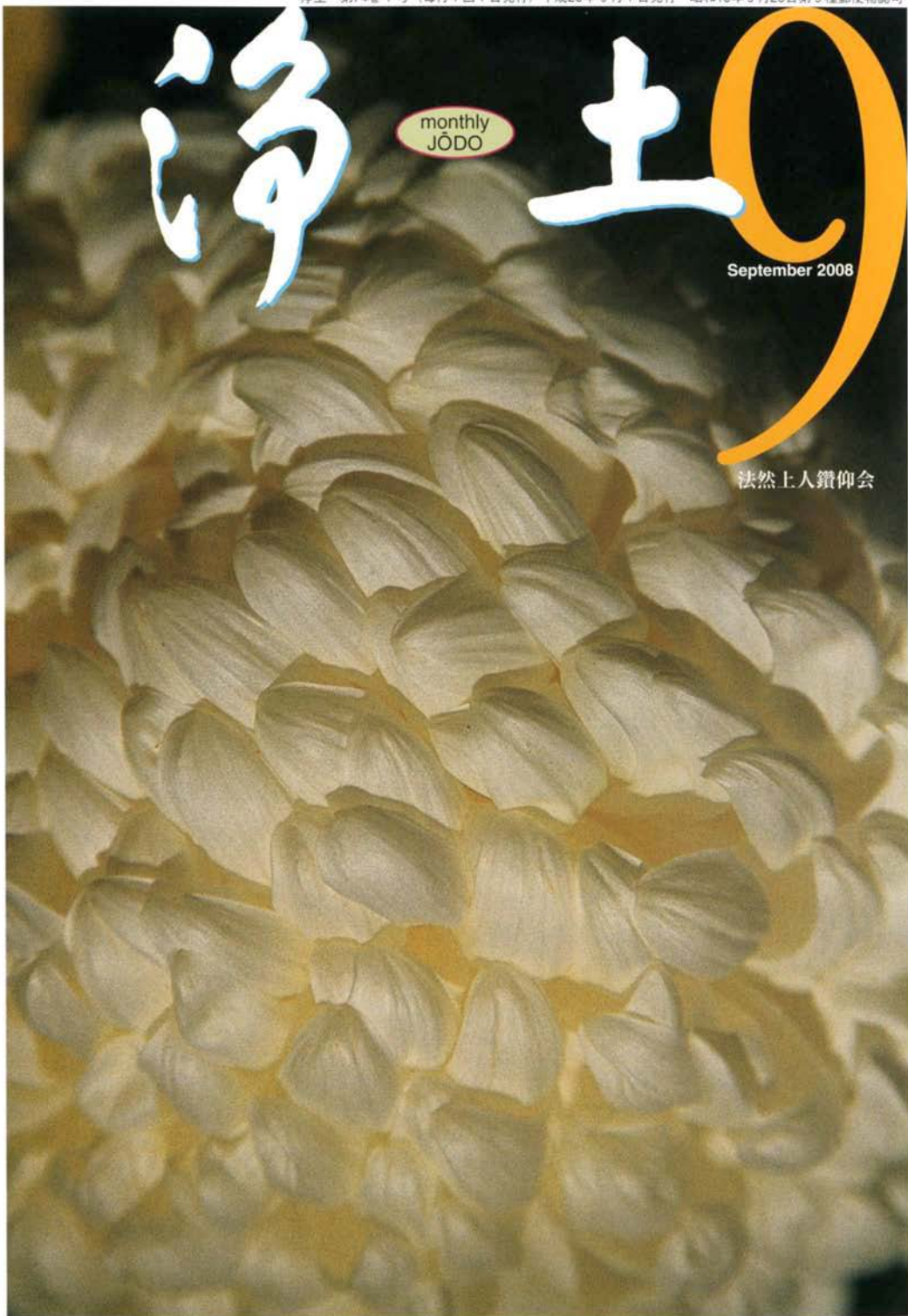
浄

monthly
JŌDO

土

September 2008

法然上人讃仰会



浄土の再会はなほだ近きになり、
今の別れはしばしの悲しみ、
春の夜の夢のごとし。
誹謗ともに縁として
先に生まれて後を導かん。
引摂縁はこれ浄土の楽しみなり。

(御流罪の時門弟にしめされる御詞)

鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年、『India』みすず書房1992年、『や・ち
また：王たちの回廊』みすず書房1996年、『東京迷路』小学館1999年、『印度や月山』
白水社1999年、『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年、『Persona』草
思社2003年、『べるそな』草思社2005年、『In-between8 鬼海弘雄 ボルトガル、マル
タ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年、『東京夢譚』草思社2007年、『集合住
宅物語』みすず書房2004年(撮影・鬼海弘雄 文：植田実)、『メッセージ』樹立社
2006年(撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ)

浄土

2008/9月号 目次

夏の名残りの四谷怪談	古井戸秀夫	2
仏教コラム「念仏の功德」.....	大室了皓	13
江戸を歩く 第十九回	森 清鑑	14
会いたい人 戌井市郎さん①	関 容子	24
響流十方	袖山榮輝	32
法然上人をめぐる人々 壇の浦	石丸晶子	36
Jフォーラム		43
誌上句会	選者=増田河郎子	44
読者の声		46
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記		48
連載 教えと法話	生野善應	49



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

残暑お見舞

巻頭特別寄稿

夏

の名残りの

四

谷

怪

談

古井戸秀夫

東京大学大学院教授

川に流される屍体

「四谷怪談」のお岩の屍体は、杉戸に釘打ちにされ、川に流される水葬でした。

夏のある夜、お岩の屍体は神田川の上流、面影橋のほとりから姿見の川に流されて漂流し、数ヶ月ののち、突如、深川の隠亡堀に出現します。お岩の屍体は両眼を見開き、民谷伊右衛門の顔をじっと見つめ、「民谷の血筋、伊藤喜兵衛が根葉を枯らさん、この恨み」と言います。動き出したお岩の屍体を見て、伊右衛門は「まだ、浮かまぬか」と言いました。「浮かむ」というのは、成仏ができないで彷徨っているのか、という意味です。それとともに、伊右衛門の脳裏をよぎったのは、お岩の屍体をこのまま川に戻したら、鳶や烏の餌食になるであろうという思いでした。伊右衛門が戸板を裏返すと、小仏小平の屍体が現れます。同じく両眼を見開き、「お主（しゅう）の難病、薬をくだされ」と哀願する顔。小平の死霊に斬り付けると、骸骨になって消えてしまいました。ほっとした伊右衛門の心も束の間、お岩の死霊は蘇って伊右衛門を苦しめ、やがて奈落へと誘引することになります。

お岩の屍体は、なぜ川に流されたのでしょうか。民俗学の調査によると、航海中に亡くなった人を除くと、水葬の風習はなかったといえます。例外は嬰兒でした。明治六年に発布された太政官布告などには、「水葬となえ死体を傍近の川流に投棄する風があったことを非難している」（『葬送墓制研究集成』第一巻「葬法」とあります。具体的な事例としては、「岡山地方では明治時代にも、間引かれた嬰兒を菰に包み、男なら扇子、女には杓子をつけて旭川に流し、それが手鞠歌にも唄われている」（同書）と報告されています。

「四谷怪談」のお岩の水葬も、川に流された嬰兒の姿から生まれたものでした。

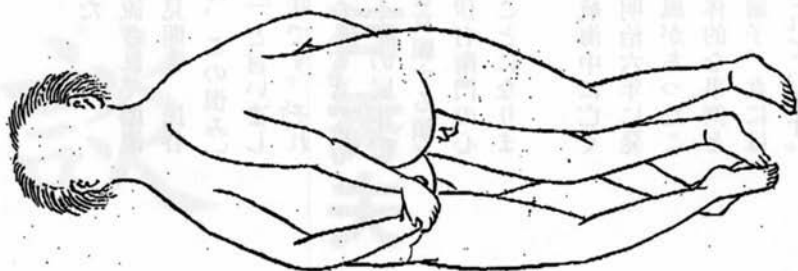
「四谷怪談」を書き下ろした鶴屋南北は、二つの随筆集を残しています。ともに原稿のままの稿本で、出版されて広く流布することはありませんでした。そのうちのひとつが、国立国会図書館に所蔵されている鶴屋南北遺稿『吹寄草紙』です。巻の十の終わりから二つ目に「異体流屍の事」と名付けて、実際に見てきた嬰兒の屍体が記録されています。

文政八酉年二月十八日、本所柳島の妙見橋、樋口へ流れ付き候、小児浮死骸。

頭一つ。耳四つ。手足とも四本。臍の辺より二人にわかれ、陰陽二体。男の方、赤く肉色。女の方白く、下になり流れ来る。

そのあとに、「全図左之通」として図版が載せられています。

「四谷怪談」の初演は文政八年（一八二五）七月です。小児の浮き死骸があがったのは、その五ヶ月前になります。本所柳島の妙見橋を横十間川に沿って南に少し歩くと、当時、鶴屋南北が住んでいた亀戸天神の横手に出ます。鶴屋南北は、この図を眺めながら「四谷怪談」の戸板返しの趣向を考えたのでしょうか。



川で殺された幽霊の代表は、累かさねの怨霊でした。顔も心も醜い女なので、婿の与右衛門に騙されて鬼怒川に沈められてしまっています。男の幽霊では、朝積沼で撲殺された小幡小平次でしょう。女房の間男に沼に沈められて死にました。生きていたときには情けなかった男の幽霊、女の怨霊が、死ぬと元氣になります。川や沼だけではなく、水のあるところならどこでも出現して、思う存分に恨みを晴らしします。

男の子と女の子、嬰兒の死骸が背中合わせになって流れ付いた姿を見て、鶴屋南北は、次のように考えたのではないのでしょうか。死んだら自由になれる累や小平次とは違い、死んでも戸板の裏と表に釘付けにされて自由に動くことの出来ない女の幽霊もいる、そのように考えたのではないのでしょうか。

同じ嬰兒の死骸を、輪池堂こと国学者の屋代弘賢も記録しています。文政八年の正月から滝沢馬琴、山崎美成らと始めた兎園会の記録集『兎園小説』の外集の巻二『異形小児の図』です。

文政八乙酉二月十七日、本所柳島十間川へ漂流したる異形の嬰兒の図。丈一尺位。産毛色濃く、頬の辺まで生え。臍は四つ股の真中にあり。もつとも女にて陰門両方にあり。

竹

表



情報を提供したのは、本所清水橋に住む屋代弘賢の伯父でした。清水橋は同じく横十間川に掛かる橋で、柳島橋から数えたと四つ目になります。もう二つ橋を越えたと、「四谷怪談」の隠亡堀の舞台となった砂村の十万坪と呼ばれる寂しい埋立地になります。近所なので、伯父の召使い林右衛門という男が見て来て図に写し取ったとあります。

二つの記録を比べると、大きな違いは「兎園小説」が女児二人、「吹寄草紙」は男女二人になっていることです。どちらが正しいかは分かりませんが、男女二人の浮き死骸だと見た鶴屋南北は、そこから「戸板返し」の趣向を思い付いたのではないでしょう。

『吹寄草紙』を読み返すと、細かなところで劇作家の視線を感じます。川を流れてきた嬰兒の死骸の頭は一つでも、耳は四つだと記録しています。『兎園小説』で林右衛門が描いた絵を見ると、たしかに顔は二つあったのでしょうか。ただ、嬰兒の死骸なので女の顔なのか男なのか判別が付かなかったのでしょう。『兎園小説』では、それを濃い産毛が頬の辺りまで生えていた、と報告しています。伝奇小説を書いている滝沢馬琴や国学者の屋代弘賢が喜びそうな記述ではないでしょうか。

もう一つ注目されるのが、男の子と女の子の違いです。顔すらも男の子なのか、女の子なのか判別が出来なかったとすると、生まれたばかりの赤ちゃんの肌の色に大きな違いが見られるのでしょうか。鶴屋南北は、男の子の肌は赤い肉色をしていて、女の子のほうは白かったと言っているのです。

さらに注目すべきは、色が白く見える女の子の死骸が、川の中で下になって流れてきたのだらうとする劇作家の想像力です。川に流されても表を向いていれば陽にあたって赤くなるだらう。肌が白く見えるのは、川の底を眺めて流されてきた結果なのではないだらう。

か。川の底ばかりを眺めてきた女が成長して、赤ちゃんを産む。産んだ赤ちゃんが、川のように流されてしまう。そのような女の怨念の連鎖が、劇作家鶴屋南北の眼には見えてきたのではないだろうか。

髪梳きの恐怖

「四谷怪談」のお岩には、生きていたときの怖さと、死んでからの恐ろしさと、二つの異なる恐怖が描かれています。生きていたときの恐ろしさは伊右衛門浪宅の「髪梳き」に集約され、死んでからの恐ろしさは蛇山の庵室で展開されます。

お岩の「髪梳き」のもとになったのは、『阿国御前化粧鏡』の主人公、お国御前です。江戸の大名は参勤交代で本国と江戸を行き来しました。江戸の本妻に対して、本国の奥方がお国御前です。孤閨を託^{たく}してお国御前は、美しい若侍を見染め恋に堕^おちました。恋煩^{こいずら}いが高じて瀕死の病人となったお国は、病床で恋い慕う若侍に騙されたことを知ります。お国御前は、恋する男に逢うために鉄漿（おはぐろ）を塗り、髪を梳きます。病気で体が弱っているせいでしょうか、髪を梳くと美しい前髪が抜け落ちて、醜く禿^{かぶ}げあがってしまいました。鉄漿をぬった口は黒く裂けたように見えます。それはまるで、「大首（おおくび）」と呼ばれる妖怪の姿のようでした。

「四谷怪談」のお岩は、産後の肥立ちが悪く、血の道が納まりませんでした。血の道に良く効く薬だと騙されて、面体が崩れる秘法の毒薬を飲まされてしまいます。皮膚は糜爛^{びらん}し、目は腫れあがり、恐



ろしい相好になってしまったにもかかわらず、身だしなみを整えるためでしょうか、歯を磨き、鉄漿を付け、髪を梳いてから、毒薬を飲まされた相手の家にお礼参りに行こうとしました。髪を梳くと禿げあがり、鉄漿で口は黒く裂けたように見えます。「ええ、恨めしい」と言いながら、抜け落ちた髪の手を握りしめると、赤い血がぼたぼたと落ちていいるではありませんか。生きながらに屍体のように朽ち果てて、恨み死に息絶えてしまいました。

「髪梳き」のクライマックスは、長い髪の手を後ろから前に投げ出

して、まるで髪を洗うかのように首筋から梳き上げるところです。梳き上がって、前の髪を後ろに振り戻すと、髪の手が生え際がリアルに禿げあがった恐ろしい顔に変わっていました。髪の手が生え際には、「羽二重」と呼ばれるやわらかな絹を使います。その生地に、人毛を手で一本ずつ丁寧に植えます。髪に施された精巧な仕掛けは、もともと骸骨の「蘇生」の場で使用するために工夫されたものでした。承和の変の首謀者であった橘逸勢（はやなり）の骸骨に祈りを捧げると、ぶくぶくと泡が湧き出て、泡の中から「生成り」と呼ばれる餓鬼のように痩せ細った男の体が現れるというものでした。半分生きていて、半分死んでいるように見えるので「生成り」と名付けられたのでしょうか。その「生成り」の頭に、まばらに生えている髪の手をリアルに見せるために「羽二重」の髪が工夫されたのです。

骸骨から人体が蘇生して生成りになるのとは逆に、「髪梳き」のお岩は生きていいる人体が朽ち果てて生成りになります。どこまでが生きているお岩の体なのか、どこからが死んだお岩の屍体なのか、その境界が曖昧なままに、お岩の体は彷徨い続けるのです。



流れ淮頂の産女

隠亡堀に現れた戸板の屍体は、再び小名木川を下って万年橋に漂着し、深川の法乗院に葬られます。施主となったのは、小仏小平の父親仏孫兵衛でした。

小平の幽霊は、民谷伊右衛門の家に伝わる桑寄生（そうきせい）の妙薬を手に入れ、その妙薬の力で御主人小塩田又之丞の難病鶴膝風（かくしつふう）は平癒しました。その姿を見た小仏小平は、息子次郎吉の口を借りて「嬉しやそれにて、未来の本望」と言い、姿を消してしまいました。きっと成仏を果たしたのでしょうか。

小仏小平という背中の頸木（くびき）から解放されたせいでしょうか、お岩の幽霊は自由自在に現れては、蛇山の庵室に隠れ住む民谷伊右衛門を苦しめます。

お岩の幽霊が、はじめに忍び込もうとしたのは、男の夢の中でした。七夕の夜、切子灯笼の光に導かれて、民谷伊右衛門はお岩との逢瀬を楽しみます。「牡丹灯笼」の怪談のように、闇の内を覗くとお岩は恐ろしい死霊の姿でした。お岩の幽霊は、「ともに奈落へ誘引せん、来たれや民谷」と言い、火炎に包まれた片輪車に乗って、伊右衛門を地獄へと引き摺りこもうとします。「片輪車」というのも、小児を盗むとされる美女の妖怪のひとりでした。

死霊の祟りで弱り切った伊右衛門は、お岩のために卒塔婆を立て、次のようにつぶやきます。

戒名つけても俗名を、やはりお岩としるしおき、世上の人の回向など、受けたらよも

や浮かもうかと、跡の祭りも怖さがいちばい。産後で死んだ女房子の、せめて未来を。

門口には、お産で死んだ人を弔うための「流れ灌頂」が用意されていました。流れ灌頂とは、四本の卒塔婆に白い布を張り、往来の人々に水を掛けてもらい、布を洗い清めて弔うものです。伊右衛門が柄杓で水を掛けると、その水が燃えて焼酎火になりました。焼酎の青く燃える炎が「心」という字に見えるので、「心火（しんか）」と呼ばれます。驚く伊右衛門の目の前に、流れ灌頂の白い布の中から、赤ん坊を抱いた産女の幽霊が出現しました。産女は産褥で死んだ女の幽霊なので、腰から下は血で赤くなっています。

産女は、「姑獲鳥（うぶめ）」とも書きます。産婦が死んで鳥になったと考えられていたからです。小雨降る闇の夜などに現れて、「おぶりよう、おぶりよう」と鳴くのだと言います。「おぶりよう」とは、赤ん坊を負ぶつてくれ、という願いでした。赤ん坊を抱いた女性の姿で現れて、通り掛かりの人に赤ん坊を抱かせる。恐れて逃げると祟りをなし、悪寒がして高熱を発するといえます。勇士が抱くと、その赤ん坊が重くなるという言い伝えもありました。伊右衛門もその通りに赤ん坊を抱くと、たちまち石地蔵になってしまいました。お岩の幽霊は、それを見て「ひい、ひい、ひい」と息を吸いながら笑って消えます。その奇妙な笑い声のことを「引き笑い」といいます。

「四谷怪談」の初演のときには、蛇山庵室からそのまま「忠臣蔵」の討ち入りの場面になりました。そのため、舞台は一面の雪景色でした。白い雪に産女の赤い血の足跡を付ける演出も試みられたようです。

「忠臣蔵」から離れて独立した「四谷怪談」は、再演以降、蛇山庵室の季節をお盆にしま

した。お岩の出現も流れ灌頂ではなく、燃える盆提灯の中から抜け出る「提灯抜け」になります。お岩の幽霊が着る、裾のすばまった独特の衣裳を「漏斗（じょうご）」と呼んでいます。酒や醤油を瓶に注ぐときに使う漏斗に形が似ているので付いた名前でした。同じ漏斗の衣裳でも、裾に焼酎火が付いて燃えたと「朝顔」になります。青白い光が朝顔の花を連想させるからでしょう。流れ灌頂から出たお岩も、この朝顔の衣裳を着ていたものと考えられています。

再び現れたお岩の幽霊は、百万遍の数珠の輪の中に匿かくまわれている、伊右衛門の母親お熊の首を齧り殺し、天井から逆さ吊りで現れては伊右衛門の仲間の浪人を手拭いで縊り殺してしまします。百万遍の念仏の声も何するものぞ、縊り殺した浪人者を仏壇の中に引き入れる荒業も見せます。しかし、肝心要かんしんようの伊右衛門には、けっして手を出そうとはしないのです。

伊右衛門を討ち取ったのは、お岩の妹お袖の許婚佐藤与茂七でした。与茂七は、これでお岩の死霊も成仏得脱するであろうと言います。しかし、悶え苦しむ伊右衛門の周りには、青白い心火と鼠が群がるばかりでした。鼠は、子年生まれのお岩の化身なのでしょう。成仏して消えることなく、いつまでも伊右衛門の周りに群がっているばかりでした。

念仏の現世における功德の一つとして「延年転寿」が説かれている。

その意は蛇足ながら、仏菩薩が守って下さるから、心も穏やかに、身も安泰にして、安楽な長命を享受することができるといふものである。

このように私は教えられて来たけれども、宗学者でもなく一介の僧侶にすぎない私はおこがましくも、これを自分なりに解釈して、念仏の糧としている。

『大漢和辞典』を開くと、延年転寿という言葉は見当たらない。あるのは延年益寿（命を長らえる）であることから、この言葉が中国では一般的に使われていたのでは、という気がする。

『般舟三昧経』では従来の一般的用語である「益寿」を使わずになぜ「転寿」としたのだろうか。命を長らえる意ならば

「益寿」で十分であったはずである。それなのにどうして「転寿」としたのだろうか。

他の意図があったのではなからうかと考えるのである。

寿を転じると読めば、短い寿命を長寿に転じ、寿命を延ばす、となるけれども、寿に転じる、と読めば「禍を転じて福となす」の意となるだろう。

寿命を延ばすは「延年」の文字を以て十文にその意を表している。

『般舟三昧経』は延年に加えて、寿（福・幸せ）を頂くことができることを念仏の功德として強調しようとしたのではなからうか。

このように考えてからは、念仏に一層の励みが出てきた。

第十九回

江戸を歩く

運河の町



森清鑑

大江戸ウォーカー

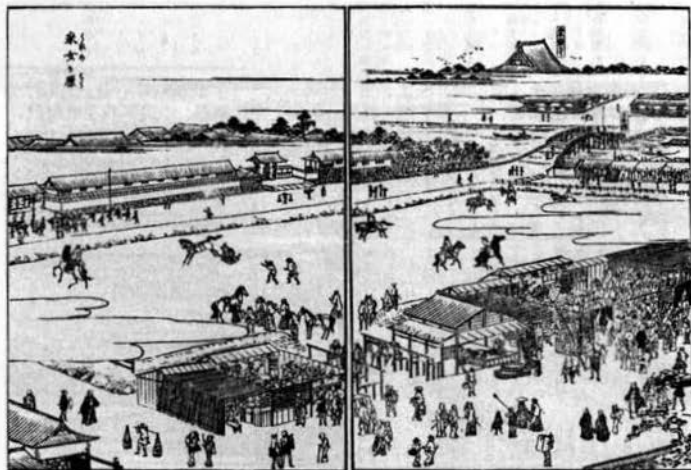
増上寺門前町

江戸時代、汐留橋から八丁堀方向に掘削して造った人工の堀が三十間堀である。当初、幅三十間（五十四メートル）、物資を運び込む重要な運河であった。その位置は、現在の昭和通りから銀座中央通り側に二角入った処を流れていた。三十間堀を舟に乗って北上する。多くの舟が頻繁に行き交っている。左右に展開する豊玉河岸と江戸の町並。右河岸一帯は、木挽町の家並みが連なる。北に上るに連れ、六丁目から一丁目。堀から昭和通りまでが江戸時代の本町四丁の幅。堀に沿って南北に細長く続く。そして今の昭和通りから東側（海側）は、全て武家屋敷である。三十間堀に架かる三原橋を潜る。この橋の道を左に真っ直ぐ行けば有楽原、数寄屋橋である。右に行けば万年橋。築地川が三十間堀と並行して走る（首都高速）。万年橋の方に歩くと、左側は熊本細川藩の拝領屋敷（明治になって歌舞伎座）。

右側一帯（歌舞伎座の前）は、采女ヶ原。馬場があり、広場がある。落馬し、ひっくり返っている武士。あわてて駆け寄る家来。正面に細川の武家長屋、右に万年橋が見える。馬場の手前は店が並び結構な賑わいを見せている。

三ッ橋

三十間堀をさらに北上すると三原橋の次に

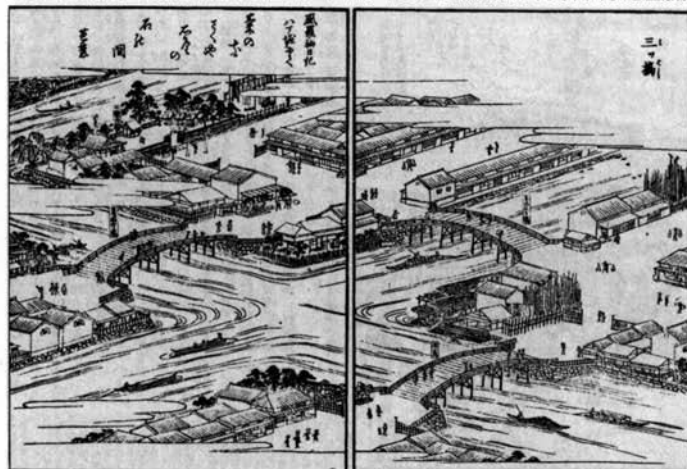


◆江戸名所図会 采女ヶ原

紀伊国橋がある。木挽町から東側は、築地川まで大名屋敷が北に続く（昭和通りから首都高速の幅）。備中松山藩板倉周防守の屋敷（NTTなど）、北に隣接して御老中、下総佐倉藩領主堀田備中守正睦の中屋敷（六千三百坪、銀座プロッサム、中央会館、電通恒産、ヤマト運輸本社）。堀田正睦は、幕末の混乱期に老中首座（現代の総理大臣）として苦労した人である。築地川は、この屋敷から相引橋（三吉橋）を潜って東に曲がる。そして、少し行くと再び南に折れ（築地川公園）、築地本願寺を含む武家屋敷の区画を囲み、魚河岸の方に流れている。この相引橋の角地、堀田屋敷から見ると、築地川向こうの東側一帯が土佐高知、山内容堂の下屋敷（中央区役所、築地警察）である。剣術修行のため、江戸に出た坂本龍馬は、当初ここから京橋桶町の千葉道場に通ったと思われる。築地川が東に転じる相引橋の北側は、大名上屋敷（本多隠岐守など）。現在の首都高速は、築地川を埋め

て、この屋敷を突っ切って掘削された。話を三十間堀に戻す。紀伊国橋を潜ると堀は、東に折れる（京橋公園前）。すると、左岸には白魚河岸が見える。角に観音様。北に曲がる。真福寺橋。真福寺橋の前は、堀と川の交差点。東西に京橋川・八丁堀、南北に三十間堀と楓川が流れる。正面に弾正橋、左手に白魚橋が見える。処の人はこれを三ッ橋と呼んだ（首都高速京橋JCT）。江戸城前の町民の町を囲む、運河交通の要衝地ともいえる。

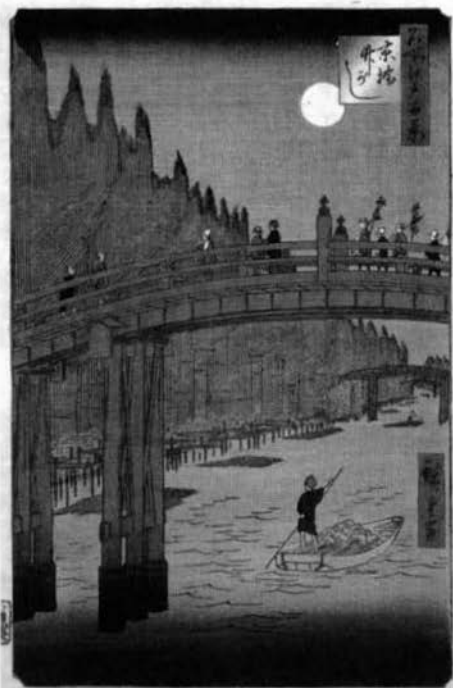
◆江戸名所図会　三ッ橋の図。左上、三十間堀を蛇行し、真福寺橋。左八丁堀、右中央京橋川・白魚橋、右下弾正橋・楓川。中央上白魚屋敷、中央下八丁堀屋敷。



京橋川

舟を真福寺橋から西に曲げ、白魚橋を潜つて、京橋方向に運ぶ。左岸に見える、広小路に囲まれている家並みが、幕府に白魚を納める権利を持つ、白魚屋敷である。そして右一帯は、竹河岸。ここは江戸でも有数の竹材市場。竹材が林立し、竹壁の景観。これが京橋まで続いている。今では想像もできない光景である。広重は、この竹河岸を京橋から白魚橋に向かって描いている。

房総半島や下



◆広重画「京橋竹がし」 京橋川左岸、堆く積み上げられた竹材、竹間屋。手前京橋、次が三年橋（炭屋橋）、絵の中央一番奥が白魚橋。

野国で採れた竹を筏に組んで運んできた。広重の絵は、河岸に横付けされた竹筏を描写している。満月の明かりの下、竹細工を積んだ舟が下っていく。江戸運河の情景。この竹河岸の北側には、炭間屋の町、炭町が広がっていた。



◆右に京橋機干の記念碑 警察博物館から後方に竹材市場があった。

江戸町造りの一つに江戸城東側の外堀から江戸湾までの開削工事がある。当初、通船堀つうせんぼりと称した。後に、堀から三ッ橋までを京橋川、それから東、鉄砲州までを八丁堀と呼ぶようになった。竹河岸の終点に京橋が架かっている。京橋は、日本橋と並び東海道に最初に架けられた橋。名の由来は、日本橋から京に向かって最初の橋、姿・形が三条大橋に似ている：などいわれている。広重は、大きく湾曲する京橋を描いている。京橋から舟を堀に向かって進めると、次が中の橋。そこまでの右岸一帯が、大根河岸である。寛文四年（一六六四）から始まる、野菜の荷揚げ市場で、江戸の町に新鮮な野菜を供給した。とりわけ、大根の扱いが多かったために通称「大根河岸」と呼ばれた。この野菜市場は、昭和初期まで三百年間続いた。当然、人が集まるので講釈場もでき、賑わった処である。中の橋を通過すると右岸は薪河岸。薪の集積地。左岸は再び白魚河岸。そして外堀に出る。比丘尼橋。

◆京橋跡 江戸歌舞伎発祥の碑



広い堀に面して道が連なっており、南に行けば数寄屋橋、北にちよつと行けば鍛冶橋が見える。



◆京橋から外堀方向。左歌舞伎碑に続いて大根河岸碑

街道を京橋から日本橋へ

御堀と京橋川、北の日本橋川、東の楓川に囲まれた町人の町を散策してみよう。銀座から京橋を渡って日本橋方向に歩く。東海道沿いに、伝馬町、通三丁目、一丁目。大きな広小路に出ると、眼前に江戸を代表する、長さ二十七間（約四十九メートル）の日本橋が架かっている。橋の麓には高札場。幕府告知がひっきりなしになされる。真ん中を走る街道（中央通り）の東西には、職人、大店、町民の家並みがびっしり。江戸で最もにぎやかな処であった。

京橋と日本橋との中間にその名も中橋広小路がある（東京駅八重洲中央口からの八重洲通りと中央通り交差点、ブリジストンビル）。ここに中村勘三郎が「猿若座」という芝居小屋を寛永元年（一六二四）に開いた。にぎやかな賑わいはためく。江戸歌舞伎発祥の地である。明暦の大火後、葺屋町に移され江戸三座

の筆頭、中村座を創始するまでの興業地で、界限は、江戸一番の繁華街。江戸っ子の気風が横溢した処でもあった。

この町は、職人町を彷彿とさせる町名が多い。例えば、中橋広小路から二角ほど北に歩き、東に転じると箔屋町。ここは金箔、銀箔などを造る、箔打職人の町である。さらに東は楓川まで樽正町。樽とは、切り出したままの、皮付き材木。ここで集積された樽は、江戸城修築にも使われた。箔屋町から街道を渡って外堀の方に行けば檜物町。浜松の檜物大工の棟梁が拝領した土地である。隣接する南に上槓町（八重洲口前、左側一帯、東京建物ビル）。ここに広重の師でもある、歌川派の総師、歌川豊国が住んでいた。近くに落語家の三笑亭可楽の住まい。豊国は、度々自宅に可楽を招いて、近隣の人々のために、今でいう落語会を催したようである。建材や大工にちなんだ町名として、この他に、大鋸町、鞘町、塗師町、大工町、具足町、畳町などがある。

る。大鋸町（京橋一丁目、ブリジストンビル南）には、広重の住まいがあった。

外堀に沿って南に下ると、南横町の次が桶町（外堀通りから中央通りまで）。幕末、ここに千葉道場があった（八重洲ブックセンタ―に隣接する北側、外堀通りから中央通りまで）。坂本龍馬が江戸に出て、すぐさま入門した道場である。北辰一刀流、千葉周作の弟、千葉定吉が開いた道場で、桶町千葉道場とか小千葉道場とかいわれた。司馬遼太郎の「竜馬がゆく」でお馴染みの道場である。定吉は、兄の玄武館（神田岩本町）を支え、軌道に乗ると、桶町に新道場を開設した。彼の剣の腕は高く評価されており、鳥取藩江戸屋敷剣術指南役にもなっている。実践的な剣法であったという。定吉に入門を許可された龍馬は、めきめき腕を上げ、桶町千葉の高弟として知られるようになった。龍馬がここに入門した理由は、定吉の名声もさることながら、土佐藩邸に近いということもあろう。桶町外堀を

左に見れば鍛冶橋御門で、入れば左側一帯は、土佐藩山内容堂の上屋敷があった（東京国際フォーラム、前都庁）。しかし、恐らく龍馬は、当初、築地の土佐藩下屋敷から桶町に通ったと思われる。となると築地川北角の相引橋を渡り、真福寺橋を渡って京橋に入ったと見られる。龍馬は、定吉の息子、千葉重太郎とも気が合い、互いに剣を磨いた。この重太郎の剣の腕前も確かなものであった。それは、定吉から道場をまかされるようになって、桶町道場が繁栄していることから察知できる。当時は道場主の腕前が道場隆盛に大きく関わっているからである。このことは、北辰一刀流本家、周作の玄武館が二代目にして衰えたことでも分かる。勝海舟暗殺を企て、二人して赤坂の勝邸に出向き、いとも簡単に海舟に説得され、龍馬に至っては、その場で弟子入りとなってしまった。しかし、言い出しつべの重太郎も、あっさりと龍馬の、この行為を認めているところを見ると、重太郎の性

格は、陰鬱ではなく、三谷幸喜の「竜馬におまかせ」ではないが、快活な好青年であつたと思われる。重太郎は、維新後、鳥取県、北海道開拓使、京都府の官吏として活躍している。重太郎の妹は、美しくも腕が立つ、千葉さな子で、龍馬の婚約者となつた。この道場には、龍馬青春時代の熱い想いが宿っている。

桶町を南、京橋川の方の下ると、鍛冶橋の前に狩野屋敷がある。幕府の御用絵師、狩野探幽が元和七年（一六二二）、御堀に面した約千坪強の土地を貰い受け、その後継者は明治に至るまでここに住んだ。探幽は、いうまでもなく江戸時代を代表する絵師で、その画業は江戸城、二条城、名古屋城、大徳寺、妙心寺などに残されている。障壁画、絵巻物、屏風など幅広い。金銭的には淡泊な人で、仙台藩主の依頼で描いた絵画の画料に沢山の米を所望し、屋敷前に積まれた米を市中の貧者に配つたという。

楓川

三ッ橋に戻る。三十間堀の直進（北）方向はここから楓川と名を変える。楓川は、弾正橋から日本橋川の江戸橋に行き着く（首都高速一号）。舟を進めると、楓川の左岸は、本材木町八丁目一丁目。材木河岸が江戸橋まで続く。江戸城修復を初めとする、材木資材の一大集積地である。本材木町の西側一帯が、これまで記述してきた京橋、日本橋の町並みである。楓川の右岸は、蔵地、河岸。大名屋敷、そして八丁堀の与力、同心の家宅がひしめく。弾正橋から二つ目の橋が越中橋で、右に伊勢桑名藩、松平越中守上屋敷が見える。そのため越中橋。この屋敷が途切れると左側、本材木町越しに、前述の樽正町がある。そして新場橋。右側に熊本、細川越中守下屋敷と九鬼隆都上屋敷。左側は、本材木町二一丁目。この河岸に日本橋魚河岸に對し、高級魚を扱う新魚河岸ができ、繁盛した。人々は、

ここを「新肴場」、通称「新場」と呼んだ。新場橋の名もこれに由来する。本材木町一丁目に架かる海賊橋を潜ると、左に「活鯛屋敷」がある。今でいう生け簀扱いの元祖のようなものであったらしい。新鮮な魚は、江戸城御台所^{だいご}に届けられた。したがって、^{まかない} 賄方（料理担当の役人）が頻繁に出入りすることになる。そして江戸橋が架かる、江戸橋広小路に出る。その右対岸は、安政三年時、牧野豊前守の上屋敷（東京証券取引所）である。

八丁堀

舟を三ッ橋から東へ進めると、中の橋、稲荷橋（鉄砲州）・江戸湾の入り江に出る。これを八丁堀という。長さ八丁は、約九百メートルだが、三ッ橋からの最初の掘削工事の距離がこの長さであったのである。堀の左右は、八丁堀河岸と本八丁堀の町民町。楓川（南北）とこの八丁堀（東西）の縦長地域には、与力、同心の家宅が密集していた。この

組屋敷は、集中的に区画整理され、それぞれ七軒町、北島町、亀島町などの町名がある（大半が現日本橋茅場町）。にもかかわらず、人々は、総称としてこの界隈を八丁堀と呼んだ。与力、同心は、時代劇でお馴染みの「八丁堀のだんな」である。

この地域は、もともと埋め立てで造成され、当初は、寺町であった。その後徐々に寺を移し、代わりに町奉行配下の与力、同心が集中して居住する、一大組屋敷が形成されていった。弾正橋を渡ると、広場。堀沿い、本八丁堀の家並みを北に曲がって行くと、岡崎町。ここから茅場町まで続く、組屋敷の密集地帯が始まる。町奉行所与力五十人、同心二百五十人の拝領屋敷である。個々の敷地は、与力二百〇三百坪、同心百坪。南町奉行所与力二十五人の総敷地は約八千六百坪、同心九千四百坪。同じく北町奉行所与力二十五人の総敷地は、約六千八百坪、同心七千九百坪。

与力は徳川の直臣、同心はその配下の侍衆。

ともに月番のときには、奉行所に出勤する。また、外役といって、江戸市中の要所を見回り、防災と治安維持に努めた。与力の報酬は、知行二百石、同心は三十俵二人扶持。しかし、実際は結構贅沢な暮らしができた。そのひとつは、拝領屋敷の一部を貸屋にしての家賃収入。また、大名家や大店からの付け届けもあった。拝領屋敷を間借りするのは医師、学者、歌人、絵師、能楽師。そのため、八丁堀界隈は、独特の文化地帯でもあった。岡崎町に隣接する北側は北島町で、その東一帯は、亀島町である。最後の測量を終えた、伊能忠敬は、この町の与力宅に住み、日本全国地図の完成に取り組む。そしてここが終の住処（日本橋茅場町二一十二）となった。浮世絵師、東洲斎写楽も近くに住んでいたらしい。俳人、芭蕉の高弟、宝井其角は、晩年、組屋敷一帯の北の外れ、茅場町の山王旅所（赤坂山王権現）近くを住まいとした。その西隣に荻生徂徠が一時住んだ。柳沢吉保失脚後、徂徠は、ここ

に護園塾を開いたのである。そこで、其角の一句。「梅が香や隣は荻生惣右衛門」。其角の俳諧の弟子でもあった、豪商、紀伊国屋文左衛門も八丁堀沿いに住んでいた。「宝永の頃までは、本八丁堀三丁目すべて一町、紀文が居宅なり。」といわれている。その他、南町奉行所与力で大岡越前に仕え、歌人としても著名な加藤枝直（賀茂真淵に傾倒し、物心両面で支え、青木昆陽を大岡に推挙し、サツマイモ開墾の元を作る）、幕末、医者で歌人の井上文雄など多くの文化人や学者を輩出している。

【参考文献】

- 「江戸史跡事典上巻」 新人物往來社
- 「江戸切絵図を読む」 祖田浩一 著
- 「大江戸復興図鑑」 遊子館
- 「江戸明治東京重ね地図」 (株) エービーピーカンパニー

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

文学座創立から七十余年、演出家としてその歴史と共に歩んできた戌井さんは、大正五年生まれの今年九十二歳。年齢を感じさせない肌の色艶と、疲れを見せない精力的な仕事ぶりには、いつも驚ろかされている。

代表的な演出作品をざっと思い浮べてみると、『華々しき一族』（森本薫）、『華岡青洲の妻』（有吉佐和子）、『鹿鳴館』（三島由紀夫）、『唐人お吉ものがたり』（山本有三）と、ほとんどが亡き杉村春子を中心とした芝居で、またそのまま新派で上演しても少しも異和感のない雰囲気演出が目立つ。

戌井さんの母方の祖父は新派の名女形喜多村緑郎、と伺ったとき、なるほどと納得がいった。杉村春子が新派に客演したときはすんなりと溶け込み、文学座の後輩女優たちが新派と一脈通じるせりふ廻しに聞えることがあるのも、あるいはそんな関係からかもしれない。

「祖父のことは物ごころついたときから知っ

てましたよ。母は喜多村の一人娘で、結婚して京都にいたのでぼくは京都生まれです。喜多村はちょうどその時分大阪にいて、南海電車の萩の茶屋というところに住んでました。祖母は大阪の芸者だった人で、祖父の弟子の花柳章太郎の奥さんも浪花芸者。母とぼくとで祖父の家に行つてたとき、たまたま花柳さんがその女の人を連れて挨拶に来たので、初めて素顔を見たんですが、色の黒いのはびっくりしました。それが、化粧かおをするとうしてあんなに美しくなるのか、不思議でしたね。祖父は色白でしたけどね」

きつと戌井さんの餅肌は、喜多村ゆずりなのだろう。

「祖父は西洋趣味で、くつろぐときは浴衣じやなくてガウンでしたよ。連れてつてくれる店も、アラスカとかの洋食が多かった」

そう言えば十七代目勘三郎が生前よく通っていた銀座の珈琲店ランブルは、喜多村緑郎ひろしご最ひい親の店だったとか。幕間に散歩に出ては、



そこでコーヒーを飲み、魔法瓶で持ち帰ってまた楽屋で楽しんでる姿を見て、中村屋が熱心に訊いて教えてもらった、ということだった。

「子供のころ、大阪で母親とよく芝居を観ました。角座、中座、浪花座と、ずいぶん小屋がありましたからね。祖父の楽屋へ行くと、



祖父の喜多村緑郎さん（左）と戌井さん。
昭和三十二年、大阪にて

今、舞台で女形だった人が胡座^{あぐら}かいちゃって（笑）、男言葉で話しているのを見ると、何か異様な感じでしたね。だから自分は将来役者になろう、なんてことはこれっぽかりも考えませんでした。しかし結局芝居の道に入って、最初のころは文学座の舞台にも立ったことがあるんですから、やっぱり祖父の影響は大きいでしょう」

戊井さんの本名は「市郎右衛門」。いかにも昔の人っぽい。

これまでたくさんの大先輩のお話を伺ってきて、たいがいのことには驚かない私だけれど、戊井さんが生きている忠犬ハチ公を触った！ という話にはさすがにびっくりした。「ぼくが両親と一緒に東京へ出てきたのは進学が就職かの時期だったのです。父は大橋^{おはし}鴻^{こう}山^{さん}と言って、都山流^{みやま}の尺八師範でした。渋谷の宇田川町の借家に住むんですが、その大家さんが日本一の淀君役者と言われた、五代

目歌右衛門さん。戦後はこの家作の跡地に若い時分の六代目歌右衛門さんが家を建てて住んでおられましたよね。ぼくのいた昭和十年代には、近くに代々木の練兵場があつて、現在のパルコ劇場のあたりは監獄でした。二・二六事件の叛乱軍の将校が処刑されたところですよ。それで、ある雪の日のこと、うちには京都から連れてきた犬が二匹いて、オスのシェパードは隣りとの境の露地のところで、メスのテリアは座敷で飼っていたわけなんです。そしたら廊下でドサドサドサと何か物音がする。シェパードが上がってきたのかなと思つて見に行ったら、かなり大きな秋田犬。あ、ハチ公や！ まだ京都弁でね（笑）。メスの匂いを嗅ぎつけて、玄関の格子を自分であけて入ってきて、お勝手でうちのテリアとふざけてるんですよ。廊下には泥足の跡が点々ついてました。慌てて追い出しましたけど、ハチ公はいつも健気に渋谷駅西口の改札口でじっと座っているんだけど、たまに

「女の一生」での稽古場、左が戌井さん、右は杉村春子さん



はそんな不行跡なこともしてたんですね」

忠犬ハチ公の銅像のプレートによると、昭和十年三月没とある。二・二六事件は昭和十一年の雪の日で、戌井さんは虎の門まで市電で行ったところを通行止めに遭い、家に引き返したそうだが、ハチ公の戌井家訪問はその前年の雪の日か。いづれにしても、昭和史を地で行くような話。

文学座の『華々しき一族』の初演を観たことは、私にとつて忘られない思い出だ。十歳年上の兄に連れられて、子供のころから「新劇」を観出したが、芝居ってこんなに面白いものなのかと衝撃的を受け、深い感銘を受けたのがこの作品だった。

どこに一番驚いたかと言えば、第一幕の終りを第二幕の最初で少し繰り返し、第二幕の幕切れと第三幕の始まりとが重なる、というそれまで観たこともない斬新な手法。

私の観た初演（昭和二十五年、三越劇場）

の配役によって状況を説明すると、つまりこうなる。映画監督の鉄風（中村伸郎）と前衛舞踊家の諏訪（杉村春子）は再婚で、鉄風の子、昌允（加藤和夫）と未納（倉田マユミ）、諏訪の連れ子の美仔（丹阿弥谷津子）がいる。この家に同居している鉄風の弟子の須貝（金子信雄）に義理の姉妹二人が思いを寄せ、昌允は美仔が好き。だから諏訪は、須貝が未納を選んでさえくれれば万事解決、とばかり強引に迫るのだが、その一幕の幕切れ。階段を登りかけた諏訪に向って、須貝が二人のどちらを選ばない理由は「奥さん、あなたですよ」と、すごい告白をする。そして二幕のアタマでこれを繰り返してその先へ進行し、また二幕から三幕へも同様の手法が繰り返される、というわけ。

「ぼくにとつてもあの作品は記念すべき特別のものなんです。文学座に入って十二年目。それまでの修業時代に、大小の公演で六十本を超える演出をしてはいるんですが、この

『華々しき一族』が、ぼくの演出家デヴューと考えているんですよ。それほど思い入れが深い。この作品が書かれたのは昭和十年、森本薫はまだ京都大学の学生で二十三歳でした。『劇作』という雑誌に載ったときから当時の劇界は瞠目したんですが、時節が悪かったし、築地座の分裂と重なって上演に至らなかった。翌年、同じ雑誌に『かくて新年は』が発表されて、怖るべき才能の出現、と騒がれたものなんですけどね」

この素晴らしい天分に恵まれた若い劇作家は、その後杉村春子と運命的な出合いを果し、彼女のために『女の一生』をあて書きした。その初演は終戦の年に、空襲警報で何回も中断されながら上演だった、ということは今も語り草になっている。演出は久保田万太郎だが、しかしほとんどは助手についた戌井さんの仕事と言える。

「森本さんは昭和二十一年の十月六日に三十四歳で亡くなってしまっんです。肺結核。窮

乏の時代でしたからね。つまり、彼は『華々しき一族』の初演を、ついに観ることができなかったわけなんです。ぼくはずっと前から昔、文学座幹事の岩田豊雄（獅子文六）先生に、どうしてこの作品を上演しないんですか？　と言いつつ聞いていたんです。すると、役者がいるかい？　誰が鉄風と諏訪をやるの？　って。先生の心づもりでは、あの夫婦役は友田恭助と田村秋子夫妻で、としか考えられなかったんだと思う。この夫妻を中心に文学座を旗挙げしようと、岸田国士先生も久保田先生も考えたくらいいい役者でしたからね。その友田恭助は、昭和十二年の十月六日に、支那事変で戦死しました。これは大きな痛手でしたね」

『華々しき一族』の上演が決まるのは、昭和二十四年のアトリエ公演（実験的な小規模公演）で取り上げた『かくて新年は』（戌井演出）の成功に後押しされた結果だった。

「荒木道子、加藤治子、金子信雄、三津田健

といった人たちの出演ですが、この芝居は非常にわかりやすかったので、お客さんが途方もなくよく笑ったんですね。こっちがびっくりするくらい。珍しく、三幹事が揃って観に来られて、森本にこのどよめきを聞かせたかったなあ、と言われたのが、まあお褒めの言葉だったわけです。嬉しかったですね」

その公演からしばらくして、戌井さんは岩田幹事に呼ばれ『華々しき一族』の演出を任される。実はもう配役のことも考えてあった。「岩田演出だったら、諏訪は多分田村秋子だったでしょうね。でもぼくは絶対に杉村さんで行く、と思った。夫の映画監督の役には、山本嘉次郎さんのイメージがあつて、これは中村伸郎。その弟子の須貝は金子信雄、彼は当時二枚目でしたからね。杉村さんが、この役どころは黒沢（明）さんだわね、って笑ってました。しとやかで美しい美仔には、当時ぼくが秘かに好きだった丹阿弥さん（笑）。お転婆で妙に魅力のある未納には、誰しもが

岸田今日子を考えたと思うけど、ぼくは敢えて研究生の倉田マユミを起用して、でも岸田国士先生に一応お伺いを立てたら、ああ、この子は今日子の友だちで、うちへも遊びにくるけどたしかに未納の一面があるね、と賛成してくださったので、配役は総てぼくの原案通りに決まりました。岸田先生はぼくの演出のサポートをしてくださったのです」

私はこの芝居の初演以来、杉村春子最後の舞台となった七演め、平成八年十二月のアトリ公演まで、何度かの公演を観ているが、そのたびに杉村春子の諏訪が若い男の告白に困惑しながらも心が浮き立つのを抑え切れず、でも家庭の平和のために須貝に出て行ってもらおう、という花やかな心理描写にうっとりしたものだ。特に緩急自在のせりふの妙味と、艶やかな声には酔わされた。

「女優杉村さんの、女優としての本当の千秋楽は、十二月十二日の横浜青少年ホールだったんですが、九十歳で、しかも翌年四月には

亡くなる人とは思えないくらい、せりふのテンポは落ちてなかった。三幕とも全部階段を使って幕となるんですが、とりわけ第三幕の幕切れのキマリは素晴しかったですね」

諏訪のその決めぜりふ。

「さあ、今度こそ、お部屋へ行つて休みましょう。あの人（須貝）は、先刻この家を出ていく前にそう言ったのよ、自分は今の所誰とも結婚したくない。そういうことを考えてみたくもない。その理由はあなただって、私だって……」

この「私だって」というときの、レースのハンカチを握りしめた右手が美しい和服の胸をトントンと叩く音が、まだ耳に残っている。そして驕慢とも取れるあだっばい声。

「名女優でしたね。身をひるがえして自分の部屋に飛びこんだあとは客席からは見えないんですが、それがぼくにも観客にも見える。つくづく演出家冥利でしたね」（つづく）

欲界の散地に生をうけたるものの心、あに散乱せざらんや。其の條は源空も力およばず。唯心は散乱すれども、口に名号を称すれば、仏の願力に乗じて、往生疑いなし。所詮唯念仏の功をつむべきなり。

法然上人「明遍僧都との問答 其三二

人は、そもそも欲望が渦巻き、心が掻き乱される迷いの世界に生まれた存在です。ですから、どうして心が散り乱れないことなどありません。そのようなことは、この源空にもまた力及ばぬことです。しかしながら、心が散り乱れたままであっても、口に名号を称えたならば、阿弥陀さまの本願のお力に乗じるのですから、往生に疑いはありません。とにかくにも、ひたすらお念仏の功德を積みめばよいのです。

「力およばず」ながらも前向きに

先日、所用で京都に赴いた。午後一時半からの会議に呼ばれたのだ。久しぶりの京都。せっかくだから京都の友人と昼食をとみにしようと、昼前に到着する予定を立てておいた。

京都までの所要時間は約四時間。早朝、長野を出れば十分だ。発つ時、長野は大雨だった。少々イヤな予感がしたけれども中央線松本を過ぎると、いったん小雨になった。しかし木曽路に入ると次第に雨足が強くなる。黒い雲。まだ午前中だというのに稲妻が走り雷鳴がとどろきだした。

「そういえば、このあたりはよく雨が降るところだったっけ。いつぞやも、大雨で列車が止まり缶詰になったなあ」といつぞやの記憶が蘇った。するとあにはからんや、名古屋行き特急列車は通過するはずの駅に停車した。

「ただ今、落雷のためこの先の信号機が故障いたしました。この列車、信号機の復旧までしばらく停車いたします。お急ぎのところ云々」

雨のせいだろうか、松本までも、じつは八分の遅れが生じていた。東海道新幹線への名古屋での乗り継ぎ時間が八分。もちろん気が気じゃなかった。

それでも、きつとこの先、遅れを取り戻してくれるに違いないと自分に言い聞かせていた矢先の故障である。しかも「今のところ、復旧の目処は立ってお

りません」とダメ押しのアナウンス。それまで焦りそうな気分を必死に押さえ込んできたが、それが一気に諦めへと変わった。

まずは会議の事務局に今のところ先の予定が分からないとの連絡を入れ、友人には昼食は無理そうとメールを打つ。あとは「諦めが肝心」「なすがまま」といつ動き出すか分からない車中でひたすら待つのみとなった。

ところが、である。斜め三つ前の乗客のイヤフォンから、いわゆるクラブ系のダンスミュージックが漏れてくる。じつは、それまでも気にしないように努めてはきた。しかし、ことこの状況に至ると、その小刻みなリズム音が耳障りになってきたのである。そればかりか、今さら焦ったところで仕方のないことばかりが脳裏をよぎりだす。

「あ、今朝、郵送した書類、間違えていたところ直したっけ？ 慌てて記憶がない」「そういえば昨日、誰々がイヤな顔したっけ。何か気に障ること言っちゃったかな？ 言い訳しとこうか」

こうなるともう、自分のことなのに自分では止められない。

釈尊の教えに「心は、動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。英知ある人はこれを直くする」(『ダンマパダ』第三三偈、中村元訳『真理のことば』岩波

文庫」というお言葉がある。

もちろん、英知ある人になりたいのは山々である。心を護り制した先に覚りの境地が開けるといふ道理も知らないわけではない。でも、せっかく楽しみにしていた友人との食事がお流れ確定となり、肝心の会議に間に合うどころか京都にたどり着けるかさえも不透明、そこへもってきて耳障りなりズム音が間断なく聞こえてくる。いくら平静を装っても内心はざわめく。しかも車中に閉じ込められては気の紛らわせようもない。なにもできない自分がもどかしくさえある。そうか、これが「力およばず」なのか。そもそもこの世っていうのは、心掻き乱され、迷いに迷いを重ねるようにできているのだ。私たちは、そういう世界に生まれたのだ。もどかしいことがあっても致し方ない。法然上人は、そうご理解されていたのである。

もっとも、ただもどかしく思っているだけでは、どうも、後ろ向きなことばかりが頭に浮かんでくるようだ。念仏往生は先の話。しかも阿弥陀さまの本願で保障されている。心ざわめき迷いに迷いながらも、ひたすら念仏を称える。あれ、これって、ひたすら前向きな話ではないか。

そう合点したところで列車は動き出した。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

法然上人
とその
時代

シリーズ第五章

壇ノ浦



第二回
作

石丸晶子

画

アーサ

四

義経率いる源氏の船団が船揃えを終え、西に向かつて瀬戸内海を進み始めた頃、平家は壇ノ浦の海、田ノ浦の岸辺に船揃いして、やがて始まる源氏との合戦に臨もうとしていた。壇ノ浦周辺は現在の呼び名でいえば関門海峡である。

その狭い海峡一带に、大船、小舟、平家は今、千数百に近い船を結集させていた。

筑前の豪族山鹿の兵頭次秀遠が召し連れた船五百余艘。

肥前松浦の党が召し連れた船三百余艘。

阿波の民部重能が召し連れた船二百余艘。

一の谷以来、平家が調達していた船二百余艘。

安徳天皇八歳の御座所である巨大な唐船の
中で、平家は今主だつ武将を集め、戦に臨む

最後の評定を始めようとしていた。

「合戦は何時になろうの」

落ち着きの無いようすで宗盛は総大将の弟・知盛に尋ねた。

「物見の早船の知らせでは、義経率いる船数はおよそ五百艘。今ごろは源氏の白旗を海風になびかせつつ、瀬戸の海を西に向かつて進んでおります。合戦は明日早朝と算段しております」

「必ず勝算はあろうな」

「義経は船戦をしたことがありません。海に慣れたわれらが千に余る船を準備して迎え討つというのです。何のご懸念におよびましようや」

知盛はそういうと、そこに控える侍たちを顧み、

「源平、これが最後の戦となろうぞ。みなみな一歩たりとも退く心があつてはならぬ。東国の夷どもに弱気を見せるな。命を惜しまず

満珠島

干珠島

浦ノ壇

浦ノ田

関ノ下

彦島



戦うは今この時ぞ」

と大音声で呼びかけた。

これを受けて宗盛の乳人子・三郎左衛門景経は、そこに居並ぶ侍たちをさっと見回し、

「仰せ承れや、侍ども」

と大声あげてわめいた。

と、悪七兵衛景清がつづいて、

「東国の奴ばらは馬に乗ってこそ威張ったことを申しますが、奴らを船に乗せて見た日には、アハハハ魚が木に登ったごとくでありますぞ。一人残さず海に沈めてやるまでのことよ」

とわめく。

続く越中の次郎兵衛も、

「九郎義経は色白く、背丈の低い男であるそうな。ハハハハ出っ歯での。目立つ男というからにはきやつを目がけて引つつかんで海に投げ込むまでのことよ」

猛り立った侍たちは次々にわめき続けた。

その様を見ながら、知盛は宗盛に、

「御覧のように、今日は侍ども士氣盛んに、いかにも頼もしくみえます。さぞや奮戦力闘いたしましょう」というと、

「これから明日の合戦の評定をいたす」きっぱりといい、緊張した面持ちでそこに詰める侍一同を見回した。

五

「われら千余の船を集めれば、これを三手に分かつ。先陣は山鹿の兵頭次秀遠やまがひでとう五百艘」知盛は命じた。「わぬしらは九州一番の船頭に強弓どもだ。真っ先に漕ぎ攻めよ」

「しかと承って候」

「先陣の侍大將は悪七兵衛あくしちひょうえといたす。秀遠ひでとうの船に乗り込め」

「承って候」

「二陣は肥前松浦まつらの党三百余艘。名に聞こえ

た勇士どもだ。しかと漕ぎ戦え」

「お任せあれ」

「二陣の侍大將は次郎兵衛つとめよ。二陣の本船に乗り込め」

「しかと承って候」

「三陣は本陣として平家一門、二百余艘を以て帝の御座船の唐船からぶねを取り囲む。本船にはこの知盛、大將軍として下知げちを取る。三郎左衛門景経は三陣の本船に乗り込み、知盛が脇に従え」

「かしこまって候」

「後詰めごづの第四陣は」

そういうと知盛は評定の座の一番後ろに控えている阿波の民部重能をしかと見据えた。

知盛に見据えられて民部は、

「この民部重能、かねてのご命令通り、二百余艘を率いて後詰めごづの第四陣を守ります」

「戦場では後詰めこそ大事ぞ。万一にも一陣、二陣に乱れが生ずれば、わぬしは直ちに船手

を二手に分け、加勢に漕ぎ向かえ」

「お任せあれ」

低く彼はいった。

「民部みんぶ」

知盛は声を改めていった。「この評定の席に詰めおる者皆が知ることゆえに申すのだが、わぬしの嫡子田内左衛門は、源氏に下つて義経に生け捕られておるな」

重能は阿波の豪族でかねて平家に服属し、重臣の一人になって歳月を経た男である。清盛が福原に宋との貿易の拠点として経の島（現在の神戸港）を築くことができたのは、この重能が築港奉行を買って出て、難工事を完成させたからである。

都落ちした平家をはじめの落ち着き先太宰府を追い立てられたとき、屋島に内裏を造つて安徳天皇以下平家一門を屋島に迎えたのも、この重能である。

平家に忠節を尽くしてきた重能であるが、

しかし先の屋島合戦のあと、海に逃れた平家の後を襲って四国に進撃してきた義経によって、嫡子の田内左衛門を源氏方に生け捕られていた。

日ごろの重能であれば、評定においても最前列に座を占め、知盛を助けて側面から意見を申し述べるにちがいがなかった。しかし今、源平雌雄を決する最大の戦評定の席（いさひのまじり）において、人目にも彼は、なぜか奮い立っているように見えなかった。

知盛のことばに答えて重能は、

「不甲斐ない息子でございます。源氏に身を寄せましたなれど、明日の合戦には出陣せず、四国にとどまって四国の守りを固める役を命じられておるとか」

「親子あい分かれての戦いであるな。されば、わぬし、思うところもあるうぞ」

「——何を仰せです。親は親、子は子。新中納言様にはお疑いかも知れませんが、戦いに

親子兄弟相分かれて戦うは常のこと。われらの明日の働きでお疑いを晴らしてみせまする」

六

「よう申したぞ。民部」

知盛はそういうと、

「されば各々、船に帰って明日の戦に備えよ」とその時、

「しばし、お待ちくだされ」

各々の本船に帰ろうとした侍たちを、重能は制するといった。

「帝はこの唐船を御座船とされまするか」

「そうだ。わぬしが手配したこの唐船を平家本陣の本船とし、帝と三種の神器、女院、そして二位殿はじめ女房方が、内大臣とともにお乗りになる。」

「お待ちください」

と重能は侍たちを重ねて制した。

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区三ツ浅草4の2の1

電話 (03) 3842-1289

振替 0018012145231

と

「唐船はいかにも目立ち、これがわれら平家本陣の本船とは誰の目にも明らかです。九郎義経もこの唐船目がけていつせいに攻めてまいります。唐船は却って危のうござい

す」

「……」

「そこでこの民部考えますに、唐船には雑兵どもに武者の装いをさせて乗せ、別の目立たぬ船に帝以下の方々をお乗せ申しては如何か

重能の考えは名案に見えた。一同が頷く中、重能をじっと見詰めていた知盛は、やがて、

「名案である」

といった。

「九郎を迎え撃つ用意はすべて整った。各々、明日は後世に名を残す戦を戦おうぞ」

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●三

〔特選〕三杯酢男料理の胡瓜もみ

浜口 佳春

この頃は、男が家事を受け持つというのも珍しくはないようだが、この男は、普段あまり包丁を持たないのだろう。刻んだ胡瓜も薄かったり厚かったりするのだが、これが男の料理というものである。

〔佳作〕金色堂の三尊拝す紅葉かな

金谷 友江

万緑や三角くじがめくれない

鳥羽 梓

三日後は死んでいるかも知れぬ蝶

井草 芳郎

●島

〔特選〕島まつり父の勇姿に声あげて

中島富士子

島の祭りである。法被に鉢巻きというのは変わりなかるうが、重要な役割りを受け持つていて、何かにつけて祭りの中心になって動

く。それが子供にとっては、他に自慢したい
ほど立派な姿に見えているのだ。

〈佳作〉 底抜けの蒼きに泳ぐ首夏の島

河合富美枝

海女潜る観光の島夏日照る

斉藤 幸雄

どの家も核家族なり島は初夏

池田 伊吹

●自由題

〈特選〉 干し物も少子化の波五月晴れ

西井 正

洗濯物といえは何本もの竿に、子供のものが
いっぱい干されたものだが、今は寂しい
限りである。地球上の人間が増え続けるのを
憂えながら、一方で自国の少子化を心配する
のだから、勝手といえは勝手なものだ。

〈佳作〉 雨音の遠のいてゆく昼寝かな

鈴木真理子

傾いて路地に消えゆく白日傘

内藤 隼人

衣裳箱きららかに紙魚走りけり

山口 信子

読者の声

投稿詩

西に海果つるところ

巨石燃える燃えて

大落暉

地上のすべてのものを

朱に染めて

巨星帰る石燃える

燃える

私は遙か手前の

無数の砂のそのなかの

一粒

ときに吹かれ

ときに溜まり

乾いた浜の

濡れる水際の

無数の父祖の砂たちと

あてどなく

繰り返す

時間

振り返れば

砂

行く手にも

砂

西の海果つるまで

朱に染まる穢土の

砂

だが聞こえるか砂よ

ひとよ私よ

あの方の名を

あの方の名を呼ぶ声が

称える声が

念ずる心が

西へ！

浄土誌上旬会のお知らせ

兼題

(季語ではありません)

花野

夜食

自由題

締切・二〇〇八年九月二十日

発表・『浄土』二〇〇八年十一月号

選者・増田河郎子(「南風」主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

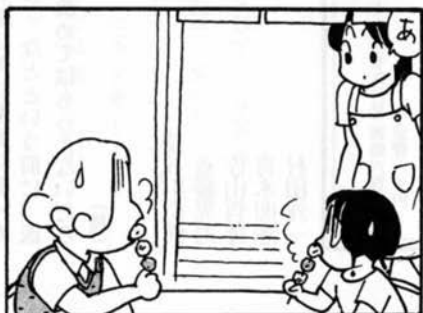
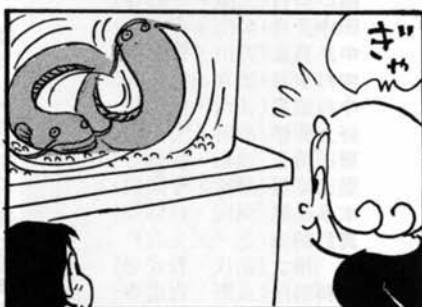
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

(東京 蓮門小子)

さっちゃんはネッ

かまちのり



今年もよ生き延びたかと彼岸花 俗潤

最近の傾向なのだから仕方ないのかも知れないが、電話相談にうつ病の方やその家族からかかる電話が増えてきた。先日でも電話をとると、うつ病と診断された兄を持つ妹からの電話であった。結婚を間近に控えているのに、一向に改善されない兄に困ってかけてきた電話だった。しかしよくよく話を聴いていると、回りが彼を病気にしているように思えて仕方なかった。妹の話によると、その兄は転職をして、今の職場を退職した。その挨拶に行ったときにみんなに励まされ涙ぐんだという。家に帰ってから涙ぐんだ

いたので家族が心配し、近くの精神科医に連れて行ったところ、うつ病と診断され薬をもらった。それ以来様子がおかしいというのだ。

最近では成人女性の五人に一人、男性でも十人に一人がうつ病だという。これは以前はうつ病と診断されなかった人も、診断されるようになったからだという。医者が言うには、病院に来た人に病気でありませんと言ったら、その人を怒らせてしまう。だからうつの状態なだけで、うつ病ではない人であっても、薬を出さないと満足してもらえないからなのだそうです。でもどうだろうか、私などはもし医者にもうつ病と診断され、薬が出

ただでその落胆よりは想像に難くない。「うつは力だ」などという前に、医者の商業主義を改めてはもらえないだろうか。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川俗潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十四巻九月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年 八月二十日
発行 平成二十年 九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八 六九四七

FAX 〇三(三三)五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

忍力成就

忍力して成就せり
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

成し遂げるには、忍耐は欠かせない。

私は大学院生の時、ビルマ仏教史の研究を志し、
バーリ語史書「サーサナヴァンサ」(一八六二)
の翻訳から出発しました。英訳を参考に気軽に始
めたものの、貧弱な語学力、夥しい数のビルマの
地名、王名、独自の宗教用語のため、さっぱり解
りませんでした。

その後、ビルマ僧院に起居したおり、ビルマ語

の人名、地名までバーリ語に訳されている容易な
らぬ資料と知りました。森さんがMr. Woods、大
阪がLarge Slopeと英訳されたようなもの。学僧
の指導を受けて、翻訳完成まで一七年を要しまし
たが、耐えれば少しずつ進み、努力は報いられる
ことを知りました。

法然上人鑽仰会の

本

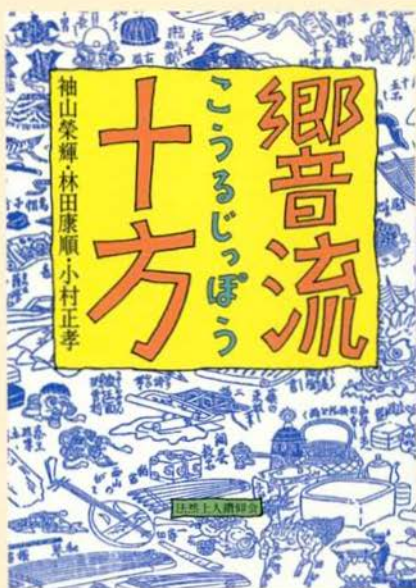
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう

600円(税別)

「差出人は法然さん」

600円



月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版

1,600円



※翻読寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)

「選擇集絵解き物語」含む

20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」

(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より